

# 「荒木村重」は何故信長に叛いたのか

## —最近の文献資料による考察—

(会員) 金谷 健一

はじめに

豊中歴史同好会では、神代から延暦年代頃までを主に勉強しているが、意外と今住んでいる地元の歴史については仔細に注意を払う人は少ない。

例えば豊嶋郡の地名について、宝徳三年(二四五二)五月に摂津守護細川勝元の命により、嶋上郡・嶋下郡・豊嶋郡を併合して摂津上郡としている。だが三年後の享徳三年(一四五四)に豊嶋郡が分離独立している(『勝尾寺文書』)。また、文明十四年(一四八二)九月の『壬生家文書』などに「摂州芥川郡」とみえるが、この芥川(河)郡とは嶋上郡を指すもので、一〇〇年後の天正十年(一五八二)に荒木村重の麾下だった、茨木城主中川清秀(現豊中市・内(打

田の出自、豊後竹田岡藩七万四千石、明治に子爵となる。尚、竹田城址は「荒城の月」のモデル」文書に「摂津太田郡茨木天石門別神社」(茨木神社蔵)とみえるが、この太田郡とは嶋下郡を指すもので、何れも徳川初期の頃までは頻繁に使われていたのを知っていましたか。(『日本歴史地名大系』)

そこで、地元の中世(信長入洛以後を近世とする説もある)の歴史から悪人視されているが、比較的知られている荒木村重の織田信長に対する謀反の真意について、最近の文献資料から考察を試みた、面白いが一読されたい。

荒木村重は信長に仕えて摂津守まで上り歴史上に君臨したのは六年間と短い、信長をして「何が、不足なのか」と云わしめたのは何故だったのか。

### 「荒木村重」謀反に至るまで

天正元年(元龜四年・一五七三)村重は織田信長の家臣となり、その翌年には攝津三守護(茨木・池田・伊丹)を倒して、伊丹城に入り有岡城と改名して摂津守となった。世は下克上の時代、天正五年信貴山城の松永久秀が信長に謀反、六年二月播磨三木城の別所長治が謀反、同年七月上旬城が毛利に攻められて開城、尼子勝久自害、山中鹿之助処刑さる。

天正六年十月、荒木村重謀反の報が安土の信長の許に届く、信長は「何が、不足なのか」と叫んだと『信長公記』にみられる。荒木村重四十四歳、惣構えの有岡城にあって何を考えていたのだろうか、同盟を結んだのは大坂石山本願寺頭如上人と一向宗徒それに安芸の毛利氏である。

だが時既に遅く、毛利(村上)水軍は六月雑賀浦にて信長方の九鬼水軍によって壊滅していて、安芸からの兵站は陸路のみとなっていた。さらに淀の水路と、西国街道を

睥睨していた麾下の中川清秀と高山右近が信長側に寝返った為、村重は四面楚歌となった。

村重の謀反については、これまで村重が見てきた信長の行動について、いとも簡単に多くの人を殺す非人間的行為と、部下の失敗にも容赦なく責めたてる性格などが、村重の心の中に徐々に芽生えたトラウマとなった事は確かであろう。



### 文献史料にみる謀反の真意

「荒木村重」研究の先駆者である故・瓦田昇（敬称略・春日丘高校教諭）の著書『荒木村重研究序説』（平成十年六月 海鳥社）から瓦田昇は村重の謀反は【註1】ジャン・クラッセの『日本西教史』から、「信長ノ抑制ニ堪ユル能ハズシテ」に帰着以外に拠を求めずは出来ないだろうと云う。「松永・別所・荒木・明智ハコレニ堪エル事ガ出来ナカッタ、タダ秀吉ノミガ堪エ抜ク事ガ出来タ」と続くが、その秀吉も信長から

敵しい叱責を二度受けている。

瓦田昇が、自著『村重序説』の中で、今谷明（横浜市大教授、大阪府誌他著書多し）の著書『信長と天皇』から正親町天皇の敵対視論を著者の持論として、田中義成（東京帝大「大日本史料」「大日本古文书史料」編纂部長）と、その門弟、平泉澄（東京帝大教授）の二人を尊皇論者として論じておられるが、私は今谷教授が田中義成や平泉澄のようなナチズムな思想をもった夜郎自大な人を筆陣の相手として選ばれたことに奇異を感じる。

瓦田昇は「今谷の結論については、直接この本を読んで頂き、ここでは触れない」と述べ、また『史学雑誌』（東大文学部『史学会』発刊）の中に評価が論じられているとあるだけで、評論については触れておられないが、そうした著者に対する胸の内を次ぎのように訴えておられる。「所々で小説に逃げ込んでいる。村重の謀反の理由や心理についても小説（司馬遼太郎の『鬼灯』）に逃げ込まないで抑えてほしかった」と月

胆されている。

ここで瓦田昇が何故か伏せていた結論と、今谷教授の著述を咀嚼して頂く為に、田中義成と、平泉澄と云う二人の東京帝大教授について述べておきたいので話を暗黒の昭和十年代へタイム・スリップする。

東京帝大の久米邦武（天保十年〜昭和六年）は明治新政府に仕えて、岩倉使節団の一員として活躍したが、後に歴史学会に転じて明治二十一年に新設された国史科の教授となる。久米教授は水戸学の『大日本史』や、頼山陽の『日本外史』を批判、明治二十四年の『史学雑誌』に発表した「太平記は史学に益なし」や、「神道は祭天の古俗」が明治二十年代の国粹主義風潮により筆禍を招き神道関係者の憤激に遭い余儀なく依願退官（久米事件）に追い込まれた。

その後南北朝並立論の天皇中心主義をひっさげて登場したのが田中義成教授だった。田中は信長について「信長は幕府を滅亡の後、自ら將軍にならなかつたのは、彼の尊王主義の故である」と述べている。

明治四十三年の大逆事件（明治天皇暗殺計画事件）の頃から国家権力が強くなり、同四十四年の南北朝正統論以後から、第二次大戦終結までは南朝正統説を私達国民学校の子供にまで教えた時代でそれは、国家権力による学問の弾圧であり国民に皇国史観を押し付けた時代でもあった。田中教授は真面目にアメリカ本土爆撃を論文発表している。

また彼の門弟であった平泉澄（明治二十八年〜昭和五十九年）は、福井県勝山市の白山神社に生まれ昭和十年東京帝大教授となる。昭和天皇に「楠木正成の功績」を進講するなど、また、「青々塾」を開き多くの青年将校の溜まり場となっていた。

平泉教授には『国史学の骨髄』や、『建武中興の本義』などの著書があり、また皇国史観の指導者として学生達の心の底に神国日本の精神を植えつけた人である。

昭和四十年に国民的支持を受けて文部省を相手に教科書訴訟をおこされた、家永三郎教授（東京教育大学）によると、平泉教

授は授業に際して教壇に立つと先ず拍手を打つ、学生を呼ぶのに「〇〇君」とは呼ばない、「君」とは天皇以外に用いるべきでない」と論ずる。また平泉教授の講義については「極端な国粹主義で到底ついて行くことが出来なかった」と述懐されている。

また大阪市立大学の直木孝次郎名誉教授は大学受験に際して、東京帝大には平泉教授がおられるので、滝川教授のおられる京都市立大を受験された逸話が残されているが、その直木孝次郎教授も戦時下には予科練の少年兵に国史を教えておられた。

京都帝大の滝川幸辰教授も、当時、東京帝大出身で慶応大学予科の蓑田胸喜教授によつて、時の文部大臣鳩山一郎（鳩山由紀夫の祖父）を捲き込み滝川教授を弾圧して免官処分（滝川事件）にしている。なお蓑田教授は早稲田大学の津田左右吉教授の『記紀批判』を不敬罪（昭和二十二年刑法改正で削除）で告訴し、美濃部達吉東京帝大教授（美濃部亮吉、元東京都知事の父）を『天皇機関説』で弾圧している。蓑田教授は

「思想検事」「學匪」と呼ばれていたが終戦の翌月、故郷の熊本でピストル自殺をしている。

話を本筋に戻すが、なぜ今谷教授はこの時代選りすぐりの極右の二人を取り上げたのであるのか、正親町天皇の譲位問題で論ずるのであれば、他に著名な評者がいたのだが。

瓦田昇は実証主義の田中と、皇国史観の平泉の二人の考え方については「信長の目的とするところは朝廷の重臣として天皇をいただき、天下の統一に専念する事であった」とし、今谷教授の結論としては今それに触れないで彼の著書『信長と天皇』を読むように示され、なお、この本の評価については『史学雑誌』に論じられているとある。また今谷教授による村重謀反の本意と心理については、「真相は謎と云うしかないが、司馬遼太郎の名著『鬼灯』（ほおずき）に詳細に叙述されている」とあつて結論を鬼灯に委ねているため、瓦田昇は歴史家と

して小説に逃げ込んでいるのが不満だと洩らされている。

私としては、小説を史論として取り上げる事に抵抗が残るが、其々の著者の各論を見てみると、まず『鬼灯』から見ると司馬遼太郎は原著『播磨灘物語』の中で村重について触れているが書き足りなかった為、正面から村重に取り組んだのがこの作品だと云われ、村重の罪を顕すのが「ほおずき」の赤い実であり、村重によって冥界を彷徨わなければならなくなった人々の魂の送り火だとされる。

司馬遷は『史記』を完成させた前漢の偉大な歴史家であるが、その名前に肖った司馬遼太郎は「司馬史観」と云う特異な史観をもった偉大な小説家であって歴史家ではない、その証は司馬遼太郎の小説は主人公の行動を読者に提供して結論は其々の読者自身の異なった見方に委ねるように書く技法だと評されている事による。

今谷明は著書『信長と天皇』の中では前述したように「村重の謀反の本意と心理に

ついては『鬼灯』に詳細に叙述されているが真相は謎と云うしかない」と自身の結論は出していない。

瓦田昇も今谷明の著書については結論に触れないで『信長と天皇』を読めと云い、この本の評価については『史学雑誌』を読めと云う。この雑誌の評価は平成五年発刊一〇二編第五号、第六章中世史に所収されていて、著述は櫻井英治、北海道大学助教（当時）となっている。瓦田昇の『村重序説』の文面を読む限り、今谷明の村重反逆に対する結論が述べられていると捉えられるが、今谷明も前述の通り謎として鬼灯の中へ逃げ込んでいて、此処では櫻井英治が皇室の式微や天皇制没落説を批判した純粋な政治学論となっている。

その著書には老獪な正親町天皇と、天皇に翻弄され続ける弱い信長を画き、戦国・織豊期の政治過程が生んだ歴史の産物だと論じている。櫻井英治の論文については学術的な面が強く、煩累なため先に進まないが、櫻井英治は今谷明の著書について「近

年の戦国史研究を代表する名著である事は間違いない」と絶賛している。

## おわりに

司馬遼太郎は結論を出さなのまま、瓦田昇は稿を閉じないまま鬼籍に入られたが、冥府を彷徨う信長や、村重とは幽界が異なる為、交流も無く、直接問質することも出来ないだろうが、冥界の総司、地藏菩薩の化身とされる閻魔庁の閻魔大王は、如何なる審判・懲罰を兩名に下したのであるのか、司馬遼太郎の【註2】脚本の中に取り込んでほしかった。

私の結論として今は、ジャン・クラッセの説に従っておき、今後の課題としたい。

【註1】ジャン・クラッセ フランス人、イエズス会士、一五四〇年頃来日、『日本西教史』はクラッセが一六八九年に、フランソワ・ソリエーの『日本教会史』をまとめたもので、内容は日本での布教に関する迫害の歴史を記したもので、明治十年の太政官本局翻訳官による

政府刊行の翻訳書であるが、著者が日本の事情知識に欠け、また太政官の誤訳が多く、現在では歴史資料としての使命を終えている。

【註2】脚本の中司馬遼太郎の小説『鬼灯』は、舞台演劇の脚本形式となっている。

### 主な参考資料

瓦田 昇『荒木村重研究序説』海鳥社。  
櫻井英治『史学雑誌』一〇二巻五号、東京大学文学部。  
今谷 明『信長と天皇』講談社。  
今谷 明『戦国大名と天皇』福武文庫。  
司馬 遼太郎『鬼灯（ほおずき）』文芸春秋社・『国史大辞典』吉川弘文館。  
『日本歴史地名大系』二十八巻、（株）平凡社。

〓二十二年度 特別展〓

## 「古墳時代の猪名川流域」

十月十六日（土）〓十二月五日（日）

池田市立歴史民俗資料館

## 勝間康雄さんの南画作品の紹介

会員の皆様には本年度から会誌『つどい』最終面に、毎月素敵なカットが挿入されている事は、お気付きの事と思います。

これは「現代南画協会」の運営委員で豊中市在住の勝間康雄さんが、当会の為に「趣味の水墨画を色紙に書いて毎月贈って頂いているものです。

その勝間さんが、去る平成二十二年九月十五日〓二十日迄開かれた大阪市立美術館（天王寺公園）現代南画展に写真の様な「宿



杉」を出展されましたので観賞に行ってみました。

親しく南画展を観賞するのは初めての事でもあり勝間さんの百号の大作に圧倒されると共に南画の素晴らしさに大いに魅せられました。

（会員） 阪口 孝男

「豊中歴史同好会ブログ」にて『つどい』バックナンバー、現地見学会写真記録がご覧いただけます。

①お名前、②性別、③年代をブログ管理人 豊中小角までメールでお知らせください。折り返し「豊中歴史同好会ブログ」閲覧のご案内をいたします。（無料）

豊中小角 豊中小角 [t.zunnu@nifty.com](mailto:t.zunnu@nifty.com)

### ■十月度最新情報

・写真記録「但馬の古代探訪」九月二三日（祝日）

・『つどい二七三号』三角縁神獸鏡と邪馬台国論 大阪大学教授 福永伸哉 先生 他

政府刊行の翻訳書であるが、著者が日本の事情知識に欠け、また太政官の誤訳が多く、現在では歴史資料としての使命を終えている。

【註2】脚本の中司馬遼太郎の小説『鬼灯』は、舞台演劇の脚本形式となっている。

### 主な参考資料

瓦田 昇『荒木村重研究序説』海鳥社。  
櫻井英治『史学雑誌』一〇二巻五号、東京大学文学部。  
今谷 明『信長と天皇』講談社。  
今谷 明『戦国大名と天皇』福武文庫。  
司馬 遼太郎『鬼灯（ほおずき）』文芸春秋社・『国史大辞典』吉川弘文館。  
『日本歴史地名大系』二十八巻、（株）平凡社。

〓二十二年度 特別展〓

## 「古墳時代の猪名川流域」

十月十六日（土）〓十二月五日（日）

池田市立歴史民俗資料館

## 勝間康雄さんの南画作品の紹介

会員の皆様には本年度から会誌『つどい』最終面に、毎月素敵なカットが挿入されている事は、お気付きの事と思います。

これは「現代南画協会」の運営委員で豊中市在住の勝間康雄さんが、当会の為に「趣味の水墨画を色紙に書いて毎月贈って頂いているものです。

その勝間さんが、去る平成二十二年九月十五日〓二十日迄開かれた大阪市立美術館（天王寺公園）現代南画展に写真の様な「宿



杉」を出展されましたので観賞に行ってみました。

親しく南画展を観賞するのは初めての事でもあり勝間さんの百号の大作に圧倒されると共に南画の素晴らしさに大いに魅せられました。

（会員） 阪口 孝男

「豊中歴史同好会ブログ」にて『つどい』バックナンバー、現地見学会写真記録がご覧いただけます。

①お名前、②性別、③年代をブログ管理人 豊中小角までメールでお知らせください。折り返し「豊中歴史同好会ブログ」閲覧のご案内をいたします。（無料）

豊中小角 豊中小角 [t.zunnu@nifty.com](mailto:t.zunnu@nifty.com)

### ■十月度最新情報

・写真記録「但馬の古代探訪」九月二三日（祝日）

・『つどい二七三号』三角縁神獸鏡と邪馬台国論 大阪大学教授 福永伸哉 先生 他

## 纏向遺跡第一六八次調査現地説明会に参加して

(会員) 阪口 孝男

『つどい273号』の「編集後記」に纏向遺跡で桃の核が発掘された記事が掲載されていましたが、実は私も新聞発表のあった翌日(九月十九日)に行われた現地見学会に参加し、発掘現場や出土物等も写真に納めて参りましたので、現地で見聞した情報も加えて発掘概況をお届けします。

●新聞紙上では桃の種のが大きく報道されていますが、今回の纏向遺跡第一六八次発掘調査の目的は、昨秋の第一六六次発掘調査で、卑弥呼の宮殿跡?か、と騒がれた四間四方の規模に還元される建物Dや近接棟持柱を持つ三間×二間の建物Cの遺構の様子を更に解明するために、これら建物南側の面積四六五平方メートルの土地の調査を実施したもので、桜井市教委では「纏向遺跡の範囲確認調査」と呼んでいます。

●調査地は大田北微高地と呼ばれるとこ



土抗から出土した桃の種  
(写真の上の二個が果肉付きの桃の種)

ろ(桜井市大字辻六三一)で周辺は纏向遺跡内でも比較的古い段階(三世紀前半・庄内式期)の遺構が密集して分布する地域で過去に行われた調査でも庄内式期を中心とした多くの遺構が確認されています。

●次に、検出された主な遺構は?



調査区の中央より東側から検出された長楕円形の土抗

1(柱列)第一・二次調査において検出された建物群の南を画する東西方向の柵の延長線上で計十一基の柱穴群を検出しています。が、東西長約二八メートルの調査区の内、中央部分の一三メートル分が溝遺構によって大きく削平されているので、この間の状況は確認出来ていません。柵の構築時期は三世紀前半の庄内式期古相段階、そして廃絶は庄内3式期(三世紀中頃)を含めてそれ以前と考えられています。

2(大型土抗) 調査区の中央より東側から検出された長楕円形の土抗で、残存する規模は南北四・三メートル東西約二・二メートルを測りますが、遺構上部の大半が後世の溝遺構に削平を受けており本来は若干規模の大きいものだったと考えられ、構築時期は出土土器の年代観から庄内3式期(三世紀中頃)のものだと判断されています。

3(大型土抗からの出土物)この土抗から祭祀用具と見られる土器や木製品等々、竹で編んだ籠などと共に話題の桃の種が、二〇〇〇個以上出土しています。この桃核の

中には未成熟のものや果肉が残ったものも含まれています。

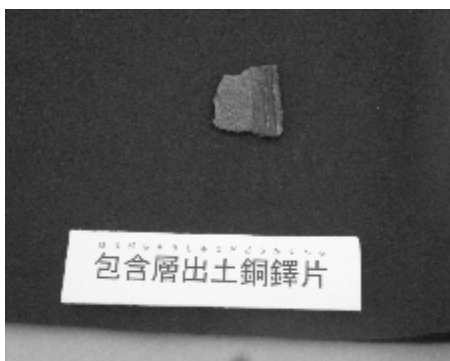
この土抗からの出土遺物は何らかの祭祀行為に伴うものと考えられていますが、特徴的なのは横槌とヘラ状木製品、底部穿孔を施した小型の直口壺を除く総ての遺物が壊された状態かつ、それぞれが一部分しか出土しておらず、土抗の周囲ではない極近い近隣において祭祀を行った後に道具類を破壊し、土抗まで運ばれて投棄されたか、或いは意図的に一部分のみを投棄したもの



土抗から出土した竹で編んだ籠

と考えられています。

4(その他の遺物)遺構に伴うものではないが特筆すべき遺物として、古墳時代後期の包含層から銅鐸の鱗の破片が出土しています。破片は長さ三・七センチメートル幅三・二センチメートル重量一三・四グラムで大型の突線鈕式銅鐸の破片と考えられるものです。調査区周辺では西約一〇〇メートルの地点で昭和四十七年に実施された第七次調査地からも略同様の大きさと見られる突線鈕式銅鐸の飾耳の破片が出土しており、今回の銅鐸片との関係が注目されます。



古墳時代後期の包含層から出土した銅鐸の鱗の破片



## 読書室

## 山伏・修験道の本尊『蔵王権現入門』

定価 一五〇〇円＋税

発行 総本山 金峯山寺 (国書刊行会)

※希望者は例会にて受付します。

大自然に学び、大自然の靈威を体得する修験道が注目されている。

役行者が祈り出したと伝えられる蔵王権現とは、

そもそも神なのか、はたまた仏なのか。なにゆえ、かくも激しい忿怒の形相を示すのか。

本書によって、修験道の本尊たる蔵王権現の全貌があきらかになります。



稲妻のかたへに但馬一の宮

宮田 佐智子



## 十二月の例会

十二月十一日(土) 午後二時より

会場 豊中市教育センター

「東大寺の盧舎那仏と河内の智識寺」

堺女子短期大学名誉学長

塚口 義信 先生

## 十二月の現地見学

十二月四日(土) 金峰山寺蔵王堂・蔵王

権現の特別ご開帳に合わせて、吉野山を巡ります。

## 編集後記

宝塚市の長尾山古墳の後円部墳頂から粘土槨が発見されました。昨年の現地見学で私達が踏みしめた正にその足の下にあったのです。しかも保存状態が良く、盗掘坑も見当たらないという事です。わくわくするような大発見です。

難波宮跡からは大量の高熱で焼けた痕跡のある土壁の破片が出ました。『日本書紀』に六八六年に焼失したとの記述のある難波長柄豊碕宮の宮殿の土壁と考えられるとのことです。今後の研究の進展が楽しみです。ね。

<http://homepage2.nifty.com/toyonakarekishi/>